

B. ハイネズ「獵場管理人」註解

高 橋 鍾

A Japanese Glossary to Barry Hines's *The Gamekeeper* With an Introduction

Atsumu Takahashi

INTRODUCTTON

1.

前回(宮崎大学教育学部紀要人文科学第54号)は、資料不足のため、Barry Hines の略歴について、殆んど述べる事ができなかった。それ以来、若干の資料を手に入れることができたので、今回はかなり詳しく報告できるのではないかと思う。といっても、彼についてまとまった評伝が書かれたわけではないし、作品についての批評書が現われたわけでもない。Manchester を本拠とする *The Guardian* 紙が John Hall 記者による Hines のインタビュー記事を、1970年7月18日に掲載していた。その記事に依って、Hines の文学の重要な背景をなしていると思われる履歴について、かなり詳しく知ることができたのである。以下、興味深い事実の数かずを拾ってみよう。

Hall 記者によると、Hines は 'academic runt' であったが、全英中等学校代表に選ばれるほど、フットボールが上手であったし、100ヤードを10秒フラットで走れるほど、足が速かった。彼はいわば、フットボールと短距離が好きであったからこそ、毎日学校へ通う気になれたのである。そんなわけで、Ecclesfield Grammar School を卒業したのち、6ヶ月間炭坑で測量技師見習いとして働いたが、フットボールと走ることへの情熱は断ちがたく、再び学校(Loughborough College)生活に戻った。名目的には体育教師の資格を取るためである。

だが、そこでの学校生活で、彼は人生の一大転機とも呼べる体験をすることになる。21才のとき初めて本と呼べるものを読んだのである。奇妙な話だが、それ以前に学校の教科書以外読んだことはなかったし、読みたいと思ったこともなかった。その読んだ本というのが George Orwell の *Animal Farm* である。その読書体験に触発されて、彼自身ちょっとした文章を書き始め、学校の文芸誌に掲載されたこともある。もちろん自発的な読書も、彼の習慣となった。Hemingway の作品にも触れ、彼の文体に一種名状しがたい感銘を受けている(そういえば Hines の情景描写には、どこか Hemingway を思い出させる簡潔さがある)。このようにして彼の世界は、今までとは全く異った方向へと進み始めたのである。

彼はいづれ身を落ちつけたら、真剣にものを書き始めたいと思い、事実3年後に *Billy's Last Stand* という劇を書きあげ、北部 BBC のラジオドラマ担当者の Alfred Bradley に送った。それが幸運にも採用され、1966年にラジオ第三放送(The Third Programme)で放送された。この成功に勇気づけられ、最初の小説 *The Blinder* を書き、更に一般家庭向け放送(the Home Service)で放送された二つの劇 *Continental Size Six* と *Kestrel for a Knave* がつづき、彼は作家としての道を歩み始めたのである。

それにしても彼が作家になるには、これまでに二つの大きな転換点があったように思われる。フットボールが上手で足が人並以上に速いということを除けば、全く平均的な労働者階級出身のその若者は、その人並以上の才能がなかったなら、炭坑で測量技師見習いを経て、John Hall の指摘するように、いまでは炭坑の所長補佐でおさまっていたかも知れない。そしてその才能があったおかげで、Loughborough College に行ったのだが、そこで本との出遭いがなかったとすれば、これまでありふれた体育教師のままでいたはずだ。炭坑の所長補佐ではなくて作家になることが、人それぞれの人生にとってどれだけの意味をもつのか、ここで二者択一的な速断はできないが、現在の自分とは異った他のものになっていたかも知れないという人の可能性を考える場合、Hines の迎った人生の重大な転換点は、ぼくたちに様々なことを考えさせてくれるはずだ。

2.

この物語の主人公 George Purse は、北イングランドのとある公爵領地の猟場管理人である。キジの雛を孵化し、飼育し、森に放鳥し、それを補食動物や密猟者から守ることを、彼はその主な仕事としている。それも公爵たちの銃のまえに、できるだけ多くの獲物を提供し、狩猟を楽しんでもらうためである。いわば一年のうち、たった一日の娯楽を公爵に提供するため、George Purse の一年間の労働はある。一方公爵とはいえば、このようなキジの猟場を五箇所と、ライ鳥の猟場を三箇所もち、八月からクリスマスまえまで、これらの猟場を巡ったり、あるいは人に招待されたりで、連日のように狩猟と猟場間の旅行に忙しく過ごす。ときにはフランスまで足をのばすこともある。

結局この際立った生活の対比が、この作品の主旋律を成しているようだ。つまり、貴族とその被使用者（労働者）の階級的差異とその非合理性が、この小説の主題なのである。もちろんその場合 Hines は貴族の日常に焦点を当てているわけではない。貴族に雇われた猟場管理人の日常を徹底的に描くことによって、貴族階級の不合理な社会的存在を浮びあがらせているのである。おそらく Hines の政治的立場から先回りしていえば、貴族など社会的に不必要な存在として描いているといて差支えない。

しかしこの小説は、そうした作者の政治的見解の単なるプロパガンダではない。プロパガンダは常に、プロパガンダの側からひとつの回答を、読者の側に用意し強要するものだ。完全にそれに成功しているかどうかは暫く置くとして、この作品が単なるプロパガンダではなく文学作品であるなら、その主題が階級対立という社会科学的なものであろうとなかろうと、読者の側に回答が委ねられるはずである。このことにはあとで触れるとして、そのまえにまずこの作品の主題について、更に具体的に作品に則して述べておく必要があると思う。

社会的に不必要な制度でも、一度制度化されたものを廃止することは、容易なことではない。そのことは歴史が示すとおりである。貴族制度が社会的に不必要不合理な存在であるからといって、現にあるその制度を急に廃止するには、当然反発が出てくる。ましてや現在 George 自身の生活は公爵に全面的に依存している。更に、莫大な公爵の富に依存している他の猟場管理人たちがいるし、領地内の農業労働者たちがいる。George たちと公爵の現在の関係を固定的に考えるなら、George たちにとって、当面自分の生活を成り立たせるためには、貴族制度は必要であるといえなくもない。これは George にとって解決不可能な矛盾である。この矛盾に乗じて、実のところ貴族制度が存続している。つまり、全くの王党派の身分制度内でしか物事を見ようしない者（例えばこの小説に出てくる Head Gamekeeper の Henry Clay や Sutcliffe 公爵家の歴史や人物に言及した新

聞の切抜きに凝っている old Ned など)を除いて、内心貴族など軽蔑しているにもかかわらず、生活のため面従腹背に徹せざるをえない者たちもまた、貴族の存在を社会的に支えているからである。George 自身、典型的な後者を代表している。意識の世界ではむしろ、作者 Hines の見解を代弁しているといって差支えない。

ところであらためていう必要もないことだが、社会科学的に言えば、近代社会の階級対立・階級矛盾は、その生産様式に端を発することになっている。つまり資本の労働支配という生産様式に、矛盾対立の根がある。だが George たちと公爵の関係を考えてみる場合、どうやらこうした経済社会学のイロハは、一見ここでは当嵌らないように見える。それはむしろ、近代的階級対立というより、前近代的(即ち封建的)階級対立といった方がよいかも知れない。しかしそれは身分制度から見る見方であって、土地所有制度から見る場合、地主と貴族はしばしば同一人物なのである。特にイギリスの場合、いわゆる「囲込み」(enclosure)に端を発した大土地所有制の恩恵に、貴族階級は大いに浴しているのだ。そのことに目を瞑れば、次のような主張も成りたつだろう。

つまり、現代の英国では王室は別として、貴族などという存在それ自体、ひどく肩身のせまい社会的存在になっている、という主張である。例えば、広大な領地を相続する場合、その莫大な相続税のため、大部分を手離さなければならないとか、贅をつくした大邸宅や城の維持・管理費に音をあげ、それを一般公開して入場料をとるといったことは、近頃よく英国のマスコミを賑わす話である。となると放っておいても、貴族などという時代遅れの存在は、この社会から自然消滅するのだから、とりたてて彼等に憎悪の目を向けなくてもよいのではないか、それよりも古きよき時代の名残りとして、彼等の挙動を眺め楽しみ、自らの日常の捌口とすればよい、というわけである。

こうした主張がなにかしら通用するような雰囲気だが、イギリスの農村の実体を知らぬぼくたち外国人の頭の隅に、確かにあるようだ。だが問題は貴族制度にあるのではない、農村の土地所有制度にあるのだ。したがって、この小説に登場する公爵は、封建的身分制度の衣を纏った大農場経営者なのである。このことを忘れて読んでしまえば、この小説はひどく時代遅れの身分制度を扱ったものに見えてしまうだろう。資本主義的農場経営者として公爵をみれば、George たちの社会的存在様式は、ずいぶん異って見えてくるはずだ。

ところで、これまでぼくは、余りにも社会科学的に問題をたてすぎてきたきらいがあるようである。だが、冒頭に引用されている Anthony Sampson の言葉に、Hines がなにを読みとり、なにを託したかを考えてみる場合、これまで述べてきたことが大いに関係してくる。というのも、ごく一部の人々に独占された田園の解放の道筋を、Sampson の言葉のなかに、Hines が見出しているのではないかとぼくは思っているからである。

かつて誰の所有でもなかった「共有地」(the common land)が、再び大衆のもとに帰ってくるだろうという予見は、歴史の発展を信ずる人々の耳には快く響く。だがそれは、大衆の自覚を抜きにした歴史の必然ではない。注意深く読めば、最後の二行に、そのことが読みとれるはずである。つまり18世紀来、田園を欲しいままに収奪していった地主階級から、再び誰の所有でもない共有地とするためには、私有の観念にすっかり呪縛されている大衆の意識変革を、このエピグラフは要求しているのだ。

そのことはまた George が作品のなかで主張する自治精神と、密接に関係してくる。自治とは、他人の頭で考えるのではなく、自分のことは自分の責任において決めるという精神のことだ。そういう意味で、George と Moorland keeper の Sam Mobie のやりとりは、なにげない話題のやりとりでありながら、重要な意味をもっている。その前後関係は直接読んでもらうとして (pp. 171

-2), George が最後にいった言葉 (‘...you’d be able to make up your own mind, instead of him [the Duke] making it up for you.’) は、彼が自分と公爵の関係を どう捉えているか、明確に表現している。他人の頭でものを考える人々に、意識の変革は望むべくもない。身分制度に意識を拗めとられた人々にとって、田園の解放など頓だたわ言ということになる。

大衆の意識が変われば世界は変わる、またその逆に、世界が変われば大衆の意識が変わる。文学作品は、世界を変えることはできない。しかし読者に意識の変革を迫ることはできる。Hines がこの作品を通して、ぼくたち読者につきつけている問題は、いわゆる文学の領域を大きく越えた、社会的・歴史的に未解決な難問である。だが彼は文学を通して、その難問の一角を突きくずさんとしているように思える。

3.

註釈の施してある語句の選択は、前回 *Kes* の場合と全く同じ方針で選んだ。

Kes に比べてページ数が多いにもかかわらず、今回その註釈の量が少ないということは、今後の研究課題のひとつである。というのも彼の最近の作品 *The Price of Coal* や *Looks and Smiles* になると、ずっと俗語や方言が少なくなっているように思えるからである。(その逆に、彼の最初の作品 *The Blinder* は *Kes* に負けず劣らず俗語・方言だらけという感じがする。)

そのことはしばらく置くとして、今回も同僚の G. Butterworth 氏から、全体に渡って貴重な助言を得た。身近に彼の助けがなければ、完成までにずい分と時間がかかっただろうと思われる。

更に、特殊な事柄、特に英国人にしか理解できないような人物・事件とか、再確認のため二三の問題などを B. T. Oxley 博士に尋ねたところ、非常に有益な回答を得た。

末尾ながら、今回もこの御両名には、感謝の意を表したいと思う。

1985年 初夏

Abbreviation

B. T. O. = *Dr B T Oxley*

D. S. U. E. = *A Dictionary of Slang and Unconventional English*

L. D. E. I. = *Longman Dictionary of English Idioms*

O. E. D. = *The Oxford English Dictionary*

O. E. D. S. = *A Supplement to the Oxford English Dictionary*

W. B. D. = *World Book Dictionary*

Webster = *Webster's Third New International Dictionary*

Y. D. = *The Yorkshireman's Dictionary*

* テキストは Penguin (1979) を使った。

Page 7 Line 1~Page 46 Line 36

Outline

猟場管理人 (gamekeeper) の仕事は二月、まず森のキジを餌付けすることから始まる。餌付けに成功すると、毎朝ワナを仕掛けてキジを捕らえ、片方の翼を革ひもで縛ってから産卵場 (laying pen) に入れる。

クリスマス休暇から一月にかけて、gamekeeper の仕事量は、他の季節に比べればずっと少なかった。だが密猟者のことを考えると、何日も休暇をとって旅行に出掛けるわけにはいかず、せいぜい自分の受持の猟場で兎狩りを楽しみ、それを売って小使銭を稼ぐのがせいぜい関の山であった。

Notes

Page Line

- 7 8 **typeset** 名詞用法はどの辞書にも見当たらないが、意味は分る。即ち、凸版印刷に使う活字みたいな型に泥が固まって、靴の裏から離れ落ちたことをいっている。
- 9 37 ... **the hen was still winning, just.** テリア犬が雌鶏を追っかけているのだが、かろうじて雌鶏が捕まらずに、犬の鼻先を走っている様子をこう表現したのである。
- 10 3-4 **in a brown flurry** cf. *in a flurry* 「あわてふためいて」 brown は雌鶏の色。
- 11 3 **feeding ride** ride は普通 passageway を意味するが、ここでは前後関係から clearing の意になるはずである。あるいは horseriding に使われていた道を仕切って、餌場を作ったのかも知れない。
- 16 14 **'That's it, Ian. Let the buggers out.'** 「やめるんだ、イアン。逃がしたりなんかしてみろ (ひどいから)。」、buggers はここではキジを指している。
- 18-9 **You'd have been having a look at summat else, if they'd have got out and taken off.** 「もし外に出て逃げていたなら、他のものを見ることになっていたらろうよ (つまり、ひどい目に会っていることだろうよ)」
- 17 36 **slobbering** 前後関係から flopping の意。cf. p. 16, ll. 28-33. あるいは slobby=muddy に関係があるかも知れない。
- 18 37 **raggedy-ruff** ruff は 16-7 世紀頃に男女共に用いた襷襟のことであるが、目玉焼の黄身をとった形が、ぼろぼろになった襷襟みたいに見えたのである。
- 19 14 **an' all (=and all)** 先行する陳述を強調するのに用いられる。
- 27 **'That's it, blame me,'** cf. p. 16, l. 14. 命令形はしばしばおどしの意を表わす。
- 22 18 **Our John'd be all right...** ここでは反語的に表現されている。
- 23 ... **the lip they give you...** cf. *give a person lip* まえの文章の I'm fed up of にづく。
- 23 14 ... **give me notice in...** notice はここでは Duke との契約の解約通知を意味する。cf. *me=my* (D. S. U. E.)
- 15 **Brightside Steel** George Purse が以前勤めていた鉄鋼会社。cf. p. 67, ll. 11-2.
- 25 39 **I hope they catch them.** they は漠然と the authorities を指す。次の文の... when they do... の they も同じ。
- 31 16-7 **It was the closest he got to having a holiday.** closest のあとに experience を入れて考えればよい。つまり、実際の休暇の季節に休みをとるわけにはいかないのです、この季節に

- 彼は、いわば疑似休暇体験をする、ということ。
- 32 14 **stump**=A docked tail (O. E. D.)
- 33 17 **wreckling**=A weak, puny, or dwarfish animal (or plant); *spec.* the smallest and weakest of a litter (O. E. D.)
- 33-4 ... **like the shape of a foil**... この場合 foil は、フェシングに用いる剣のこと。
- 34 2-3 ... **this flue brush of an animal**... *cf.* *flue-brush*= a cylindrical brush of wire or strips used to clean the scale and soot from the interior of a flue (O. E. D.) 即ち Sam の体型が flue-brush のような恰好だということ。
- 37 5-6 ... **the school pack of beagles**, この場合 school は、学校の所有を示している。
- 38 15 ... **as it was six feet higher**... 立っても座っても、入口付近の臭は全く同じであるということ。
- 40 9 **star** クロッカスの花壇が、星のような形をしているのである。

Page 46 Line37~Page 104 Line 6

Outline

キジの卵を孵化させるには、二つの方法がある。まずひとつは、巣についた雌鶏を農家などから手に入れてきて卵を抱かせるという方法である。George はなんとか九羽手に入れ、一羽につき16〜7個抱かせた。この場合は、毎日親鶏の世話が必要となる。もうひとつは、孵化器に入れるというやり方である。孵化器の場合、毎日が少々面倒である。適度の湿気を保ってやる必要があるし、二週間目にはうまく胚が成長しているか調べ、成長していない場合はその卵を廃棄する必要がある。そうした仕事のあい間に連日のように森に出掛け、キジの天敵になるカラス、カササギ、カケスなどの巣を壊し、親鳥を撃ち落したり、ワナを仕掛けてキツネを捕まえたり、キジの生育のための環境作りをする。また季節に関係なく、密猟者の警戒をしなければならない。

Notes

Page Line

- 50 13 ... **never mind hit it**. 「それにぶつけるのはいうに及ばず」 *cf.* *never mind*=let alone (L. D. E. I.)
- 57 15 **puther** obs. and dial. form of POTHER. (O. E. D.)
- 60 3 **You ask a question and nobody's ever doing owt**. 「問いただせば誰もしてないという。」
- 36 'Have I?' あとに your jacket pockets slapped を補って考える。
- 65 12 ... **I'd look well**... 皮肉でいっている。
- 33-4 ... **the finality of Kamakasi pilots**. Kamakasi は Kamikaze であるが、別段誤植というわけではない。英米人が音だけに頼って書けば Kamakasi になりうるからである。
- 66 21 **Nine 'til four**... 一日の労働時間のことをいっている。
- 22 **She doesn't know she's born**. *cf.* *not know one is born*=to have an easy life, esp. in comparison with a former or earlier time (L. D. E. I.)
- 25 **She's never come home black bright**... 「(肉体労働者のように、機械油で、あるいは石炭の粉塵などで) 顔が黒光りするほど汚れて帰宅することなどない。」
- 67 7 **mortage** mortgage の誤植。
- 68 9 ... **they're that close up in the village**, 「彼らは、村でお互いすぐ近くに住んでいるんだか

ら……」

- 70 6 ... **called him a right little puff.** puff も7行目の *fairy* も共に *homosexual* の意味がある。
- 73 7 **nobble**=To strike on the head (D. S. U. E.)
- 74 22 **made cover** *cf. take cover*
- 76 13 **post office** 日本の便郵局を想像してはいけない。もちろん主たる業務は日本と同じであるが、店が付属していて、そこでは雑誌類、食品、菓子類などが売られている。
- 16-7 **window display**=a display of goods in a window designed to attract customers (Webster)
- 78 5 ... **with the sun braying down on it.** 「太陽がじりじりと車に照りつけて……」
- 34 **Sweeney Todd** [He] is the Demon Barber—the protagonist of one of the most notorious of Victorian melodramas. Once he had his victims in the barber's chair, on the pretence of shaving them, he tipped them into the cellar where they were murdered and their flesh used to fill meat-pies which Sweeney then sold. A good example of nineteenth-century capitalist entrepreneurial initiative! (B. T. O.)
- 79 31 **All I shall finish up with is a lump of jelly...** 「(気をつけないと)パイの中味とおさらばすることになる。」つまり美味しいところを取られてしまう。
- 80 12 ... **pulled himself a glass of bitter.** 「自分で一杯のビールをついた。」pub などでは、地下のビール樽からカウンターにパイプが通じていて、客の注文に応じて蛇口の取っ手を手前に引くと、ビールが出てくる仕掛けになっている。
- 32 **our Bess** 犬を話題にしている。
- 37 **He was a right cunt...** 「まったくいやみな奴だったよ……。」 *cf. a silly cunt*
- 81 36 ... **them buggers being thrown off...** 「連中が首になる (なんてことは聞かないね)」
them buggers はここでは *judges* を意味する。
- 82 17 **Soft Mick** 初めて言及された名前であるが、おそらく彼らの仲間の誰かのニックネーム。
- 83 6 **no fear or favour** *cf. without fear or favour*=with complete fairness (L. D. E. I.)
- 86 23 'Sun my eye.' *cf. My eye!* 即ち「陽なかを歩いたために頭痛がするなんて、まさか。」
- 87 23 ... **like the maid in the garden.** The reference is to the English nursery rhyme 'Sing a Song of Sixpence' in which a maid, hanging up clothes in the garden, has her nose pecked off by a blackbird. (B. T. O.)
- 93 32 **chomp**=var. of CHAMP (O. E. D.)
- 95 9 **He's bound to...** あとに come back here を補って考える。
- 96 22 ... **let's be having you.** *cf. let's be having you!* A foreman's call to start work (D. S. U. E.)
- 35 **in the shit**=in trouble (U. S. U. E.)
- 99 19 **rag**=to creat a disturbance (D. S. U. E.)
- 34-5 ... **tethered to their Y sticks feeding...** See p. 63, ll. 25-8.
- 102 17 **It could have been an eyelash fallen on the shell.** 雛が突ついて作った最初の割れ目は卵の殻のうえに落ちた睫といっても、立派に通用する。

Page 104 Line7~Page 139 Line 17

Outline

雛が孵って森に放せるくらいの若鳥に成長するには、八月頃までかかる。その間一日の休みもなく、世話がつけられる。孵化器で孵った雛は、最初は赤外線ランプを天井からつるし、ダンボールで仕切った囲いのなかで飼育するが、一週間もすると昼間は、野外の囲いに出してやる。親鶏のいる雛も同様、野外に出す。二ヶ月目頃になると、雛たちはなにかのストレスがたまって、弱い雛の羽根を突つき始める。それを放っておくと、死ぬまでつづけることがある。そこで嘴折 (debeak) を施してやる必要がある。放雉期が近づくと、害鳥獣駆除のため、いままでにもまして忙しくなる。

二月にキジの餌付けを始めて以来、一日も休むことなく働いたのち、ようやく半年後に、若鳥を森に放つことができたのである。

Notes

Page Line

- 105 9 **hook** shook の誤植。
- 106 38 **never mind** See p. 50, l. 13.
- 107 6-8 mother partridge が叢のなかでじっと卵を抱いていて、草刈器に巻き込まれてしまう場面の再現。
- 29-30 **A bit of draught or a dowsing and they've had it.** 「ちょっとした風通しが必要だ、さもなければ、びしょぬれにでもなったら、それでやつらは一巻の終りだよ。」
- 108 11 **myxi** 野ウサギ駆除のための薬品であろうが、詳細不明。
- 109 12 ... **be snided out with...** 前後関係から be overwhelmed, be upset about の意。
- 110 1-2 **There's nowt too hot or too heavy for them buggers up there to handle...** 「連中にとっちゃ手当り次第いただきってことさ……。」文字通りの意味は、「熱すぎて、あるいは重すぎて手に余るものはなにもない」 them buggers up there 「住宅団地の連中」
- 19 **You don't know you're born...** See p. 66, ll. 22.
- 111 4 **forelock tugging** cf. *pull one's forelock*
- 113 32 **pancheon**=A large shallow earthenware bowl or vessel, wider at the top than at the bottom, used for setting milk to stand in to let the cream separate, and for other purposes (O. E. D.)
- 114 6 **'Bring out your dead!'** ペスト大流行のとき、官吏が玄関先でこう叫んだ。もちろんここでは、George がからかったのである。
- 13 **George Best** He was the golden boy of British football in the 1970's, often considered one of the most talented players ever to perform in this country. (B. T. O.)
- 14 **George Formby** He was, in the 1930's and 1940's, one of the leading English music-hall comedians (from Lancashire, actually). His speciality was the singing of comic songs to his own accompaniment on the ukulele (a stringed instrument, like a banjo). He made several films in which he usually appeared as the provincial simpleton, taken advantage of by everyone, but victorious in the end. (B. T. O.)

- 18 ... **you might as well talk to that frying pan.** 「……あのフライパンに向かって話した方がました。」即ち、「全く無駄だ。」
- 27 **I just wondered if she'd started sitting or not.** 「親鳥が既に卵を抱き始めていたかどうかと思ったもんだからね。」即ち、既に抱卵中であれば、一日以上中断したことになり、卵は孵らないだろう、ということ。
- 116 13 ... **face that.** いいかえれば **do that.** 即ち **move the armchair** の意。
- 117 6 **I reckon it's improvement...** 「その方がずっといいわよ...」 もちろん冗談。
- 118 19 **I wish I was a million behind him...** 「公爵より100万ポンド少ない身分になってみたい」公爵の全財産は100万やそらの額ではない。
- 33 **SILVER** 商品名である。
- 123 28 **pop hole**=a hole in a hedge, fence, etc. through which animals can pass (D. S. U. E.)
- 125 7 **On Gold Cup day** Ascot week のなかの一日であるが、メイン・イベント的な催しがある日のこと。
- 126 35 **debeak** cf. p. 127, ll. 5-7. =to remove the tip of the upper mandible of (a bird) to prevent cannibalism and fighting (Webster)
- 127 30 **corvids** 普通は **corvidae** と綴る。
- 31 **alpha-cholerose** カラスなど駆除するための毒薬であるが、詳細は不明。
- 128 1 **bell pits** 掘られた抗口が、釣鐘を逆にしたような形になっているから、こう呼ばれているのであろう。
- 26 **beano**=a jollification (D. S. U. E.)
- 134 22 **The Hound of the Baskervilles** Conan Doyle の推理小説の題名にある。
- 135 21 **crozzled**=curled, huddled together (O. E. D.)
- 136 20-1 **come across**=give, yield (D. S. U. E.)
- 138 5 **mane**=A ridge of tuft of grass or stubble, left by the mowers (O. E. D.)

Page139 Line18~Page 185 Line 26

Outline

手塩にかけて育てたキジを森に放ち、その感慨に浸る間もなく、ライチョウの狩猟シーズンが始まる。公爵は三つの獵場をもっていて、隔週毎に金・土・月とやってきて射撃を楽しむ。自分の獵場を使わない場合は、人の招待を受けて狩猟に出掛ける。八月に始まり十月の第二週過ぎまで、ほとんど連日のように旅行と狩猟に明暮れる。それからしばらく休息をとり、十一月から始まるキジの狩猟シーズンに備える。

一方 George ら獵場管理人たちは、公爵が近くの獵場にくるたび、銃の装填係として、あるいは勢子として駆り出される。その合間あいまには、もちろん自分の受けもちの獵場を管理しなければならない。

このように、まず八月十二日、George の同僚である Sam Dobie の獵場から、ライチョウの狩猟シーズンが始まった。

Notes

Page Line

- 140 11 **They were also ready at the Big House.** *p.* 139, *ll.* 24-5の All was ready. *p.* 140, *l.* 19の The grounds were ready too. 更には*l.* 25の But George Purse was not ready. に呼応している。Theyはthe Big House に関わる人々を指す。
- 145 20-1 **I don't know what you're having 'til I've been to the shops.** 即ち、店にいったところにある品物をみて dinner の材料を決める、ということ。cf. *p.* 180, *ll.* 11-4.
- 147 3 **Tom Pepper** うそつきを強調しているわけだが、具体的な人物像は不詳。
- 9 **special**=adv. In a special way; especially, particularly (D. S. U. E.)
- 26-7 **We could do a lot worse.** いいかえれば We could have a worse person than the Duke. となる。
- 150 22 **well in**= (Of a person) popular (D. S. U. E.)
- 153 20 **the Jarrow Crusade** This is the central symbol of workingclass protest against unemployment in the nineteen-thirties. Jarrow in the north of England had a tremendously high unemployment rate and from there workers set out, gathering others on the way, to march to London. It's a very evocative incident for the English Left. (B. T. O.)
- 156 1 **about time**=the right time; at last (used to refer to something that the speaker feels should have done earlier (L. D. E. I.)
- 158 31 **shat** ここでは shit の過去形として使われている。
- 170 29 **'... let's have a bottle.'** 「...一本よこせ。」 let's=let me
- 171 32 **Would you, Sam?** you のあとに get drunk を補って考える。
- 172 24 **They** 公爵たちを指す。藪のなかに潜むライチョウの比喩でいっている。
- 180 20 **the Savoy Grill** cf. *p.* 176, *ll.* 30-1. Londonの有名なホテルのレストラン。
- 182 34 **... blank them out...** つまりキジの影を銃の先でおおうように、ねらいをつけるのである。
- 184 27 **the pleasant poacher** もちろん pleasant は皮肉。あるいは pheasant の誤植かもしれない。

Page 185 Line 27~Page 224 Line 22

Outline

いよいよキジの狩猟期が始まり、George の受持つ猟場が、その一番手ということになったので、彼が準備万端整えなければならぬ。その朝、勢子たちがストライキを起し、2.5ポンドだった日当を、3ポンドに引き上げるよう要求するという予想外のことがもちあがったが、その問題をなんとか片付けると、彼は勢子を組織して、狩猟パーティーに一羽でも多く撃たせようと、隈なくキジを狩立ててゆく。銃撃が盛んであるということは、これまで彼が自分の仕事を立派に果してきたということの意味し、そのことはうれしく思うのだが、彼が手塩にかけて育ててきたキジたちが、次から次へ撃落されるのを見ると、なにか割切れぬ想いが残る。

午前中は三度にわたって狩立てがあり、それから昼食ということになったが、昼食時間も終りになる頃、雨が降り始める。そこで午後は雨のなかの狩立てということになったが、二度目あたりになると、あたりは薄暗くなり、勢子たちは全身びしょ濡れになったため、そこで打ち切りということになる。その日の成果は、137羽のキジをはじめ、合計158羽であった。

あと一ヶ月もするとクリスマスになり、狩猟期も終りになる。そうなれば、来年の二月まで彼の仕事はうんと楽になるはずだ。

Notes

Page Line

- 186 10 **Mr Drake Puddle-Duck** This is a character in a series of children's books by Beatrix Potter, published in the early 1900's. All the characters are humanised animals. (B. T. O.)
- 192 10 **mount**= (of a gun) elevation (O. E. D)
- 193 25 **punching it** *punch it*= To walk (D. S. U. E.) *cf.* also *beat it* and *punch outsides*
- 196 15 **tatties** *tattie*=A potato (D. S. U. E.)
- 198 13 **a bit much** *cf. too much*= (Slang) very poor. terrible (W. D.)
- 37 **plumbed down** *cf. fall plumb down*
- 202 19 **You could be on to a winner...** (色々考えた末) 最も有望な名 Buck に到達できた、ということ。
- 31 **a football rattle** 試合のとき応援のために音を出す小道具。
- 204 25 **...the gun or the flask?** まえに which was he on form with, を補って考える。おそらく flask のなかには酒が入っている。
- 38-9 **I wouldn't mind a couple of tilts from that little silver flask of his...** 「ほんの二・三滴でも結構、そいつを頂きたいもんだ...。」
- 205 32 **manky**=Rotten; very inferior (D. S. U. E.)
- 206 38-9 **...go and sit in the one and nines.** (映画館で) 最上等の席に座る、ということ。 *cf. one and nine*=one shilling and nine pence
- 207 28 **...he thinks the world of Old Bob does the Duke.** does the Duke は一種の tag question と考えてよい。'Does' simply repeats and intensifies 'think the world of'. Cf: 'He likes watching the television, does my brother'. The usage is slightly uneducated. (B. T. O.)
- 38 **They don't know they're born...** See p. 66, l. 22.
- 208 9-10 **They think it's summat that only happens to matches.** *cf. strike a match*
- 209 26 **keep the cart on the wheels** *cf. To keep cart on wheels*=to keep straight, or to keep things going (O. E. D.)
- 32 **a right cunt** See p. 80, l. 37.
- 211 12-3 **...made a mould with his hands around the flask top.** 手を温めるときの仕草を考えればよい。
- 213 5 **I could just get ligged down for an hour...** 「ほんの一時間ばかり寝ころんでいたい...。」 *cf. lig*=to idle, to lie about (O. E. D. S.)
- 214 9 **...siling it down** *cf. sile*=rain hard (Y. D.) ここでは他動詞で、目的の it は rain.
- 215 21 **R. S. P. B.** Royal Soc. for Prevention of Beak もちろん架空の団体。
- 216 37 **jumping rackers** 「空葉莢」のことであろう。 *cf. cracker*=A cartridge (D. S. U. E.)
- 217 18-9 **...the fortifications they had at lunch haven't had time to wear off...** 昼食のアルコールが、まだ体内に残っている、ということ。
- 220 33-4 **The wind'll have to change before this lot stops.** 「風向きが変わらない限り、こいつは止みませんよ。」 this lot は、ここでは雨のこと。 (1985年4月27日受理)